
K O ・ N ・ K A T U ～恋は仁義なき戦い！～

水嶋かおり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

KO・N・KATU〜恋は仁義なき戦い！〜

【Nコード】

N3469G

【作者名】

水嶋かおり

【あらすじ】

「男になんか負けるもんか！」仕事一筋で生きてきたキャリアウーマン雨宮怜子、独身のアラフォー女。「仕事は結婚相手を探すため」池袋のキャバクラで働く江尻綾香、同じく独身のイマドキの小悪魔女。ふとしたきっかけで二人は出逢い、『幸せな結婚』を目指して、婚活を繰り広げてゆくのだが……。年齢も性格も全く異なる二人の女性の視点で、『結婚』へ向けた恋の行方をコミカルに描く、恋と青春のストーリー！

プロローグ

現在、日本の20歳〜39歳までの未婚率は、男性が約60%、そして女性が約49%と言われている。

これは、50年前の同世代の未婚率と比べると、男性が1.7倍、そして女性に関しては実に2倍以上に増えている。

なぜこんなにも女性の未婚率が上がってしまったのだろうか？

90年代後半以降、男になんか負けるものかと、社会のいたるところでキャリア志向の女性たちが脚光を浴び始めた。そして、社会で活躍しはじめた女性たちは、時には男性たちよりも経済的に豊かになり、休日にはホテルで一人のんびりと、豪華なランチとエステで過ごす、そんな生き方がカッコイイと憧れ始めた、まさに女性たちの自立の時代である。

——しかし!!

今年のリーマンショックをきっかけに日本、いや世界中に空前の大不況の波が押し寄せてきた。

男性も女性も年収は愕然と下がるいっぽうで、時には仕事を失う危険までが出てくるような時代である。

この未曾有の大不況の中、人々はどう生きてゆくべきか、頭を抱え始めた時、ふと女性たちは思いついた。

『結婚をしよう!』

今ままでは、男性になんか頼らず、一人でも生きてゆけると考え

ていた女性たちが、『結婚』をする事により、先行きの分からぬ将来へ不安を払拭しようと考え始めたのだ。

『一人で乗り切れない事も、きっと二人でなら乗り切れるだろう』

その通りである。人類は進化の過程において、厳しい環境に遭遇してしまった時、共存・共栄を成し得た生物だけが生き残り、新しい時代へと進化を遂げてきたのだ。

時は、世界同時不況の真っ盛り――。

女性たちの結婚への活動の火蓋は、今、静かに切って落とされた。結婚への活動、つまりは『婚活』。それは、女性たちが生き残りをかけた、まさに恋の仁義なき戦いの始まりであった――！！

その女、雨宮怜子35歳（前書き）

今回のお話は、怜子目線で物語は進みます。

その女、雨宮伶子35歳

「……北海道お!? ちょっと、部長、なんで私が急に北海道なんか行かなきゃなんないんですか!」

私は、目の前に偉そうに座っている男を睨み付け、その男の机を両手で思いつき叩きつけた。

「……えっと、雨宮君は転勤拒否と。はい、分かった。オツケー、もういいよ」

「えっ、ナニ!? ちょっと、もういいってどういう事よ!」

不気味なくらいに淡々と、私に唐突な話を切り出したかと思うと、急に席を立ち社長室に向かおうとしている部長に対し、私は思わず両手を広げて彼の前に立ちふさがってしまう。

「……何の真似だ、雨宮君」

「説明して下さい、部長! 一体なんなんですか、この話は!」

ヒールを履いたら170センチは超える私でも、やはり男性が持つ威厳には太刀打ちできないのだろうか。私を静かに睨む部長の視線は鋭く、直視していると緊張で心臓の鼓動が早くなってゆくのが分かる。

「……リストラだ、雨宮君」

その言葉に私の頭は真っ白になった。

リストラー！？

この私が！？

一体どうして！？

四年生の大学を卒業後、私は今の会社に入社した。

私の大学時代、この会社のTVコマーシャルは毎日のように頻繁に放映され、そこで使われたCMソングは必ずヒットするという伝説まで作られた、まさにその名を知る人はいないと言われる宝石を扱う全国チェーンの会社だ。

大学で経済学を学び、流通に興味を持った私は、この日本中の一世を風靡した会社で、誰よりもトップに起^たってやろうと、とにかくやみくもに働き続けた。おかげで、入社してまもなくすると、私は都内のお店の店長を任され、その後ついには女性としては初めてのエリアマネージャーとして東京本社に呼ばれるという異例の人事を受け、都内数十店舗の管理運営と、スタッフたちの育成に取り組んできた。

エリアとしての管理はもちろん、売上の達成も幾度となく行い、この会社の発展にかなりの牽引をしてきたつもりだった。

自分が育てたスタッフで、いまやエリアマネージャーとして活躍しているスタッフも何人かいるし、いわゆる男性だらけの本社内、彼らに負けずに命がけで戦ってきたプライドもある。

それなのに、この私がリストラあゝ！？

悔しくて――無意識に私の瞳に涙がたまってゆくのが感じられる。歯を食いしばり、部長を睨み返すのが精一杯で、何か言葉を発しようとしても、何も言葉が思いつかない。

「雨宮君、キミも知っている通り、我が社は先日民事再生の手続きを申請し、それは東京地裁に受理された。社会では……民事再生を受けるような会社はもう倒産だと言われるかも知れない。だが、それは違う。かろうじのところで、我が社は生き残れたのだ。民事再生とは、会社の生き残りを賭けた再出発だ。それには、多少の血を流し、会社の余分な贅肉は削り取って行かねばならない」

あくまでも、淡々と話を続ける部長の言葉に、次第に私はイラつきを覚えてくる。

「じゃあナニよ、この私があ、会社の贅肉でえ、会社が生き残るためにも削られなきゃなんないってアンタは言うワケ！？ ふざけんじゃないわよ！ 私がどれだけこの会社のために働いてきたと思ってるのよ！」

「雨宮君！ いいかい、君には理解できないかもしれないが、今、この大不況の中で、各企業が一番もてあましている人間とは、君たち三十代の管理職の人間たちなんだ。君たちは、年齢的にも、もちろん役職についている分も、二十代の若者たちより遥かに給料が高い。特に我が社に関して言えば、これから未収益店の退店を一気に進めてゆこうとする中、管理職など、昔のようには何人も必要はないんだよ。……つまりは、申し訳ないが、会社にとって高い年収が必要な君たちは、会社の贅肉以外の何モノでもないんだ」

「そ、そんな……」

「そんなもクソもない。……だからと言って、君のようにプライドが高く、ハナっぱしの強い人間は、現場にもどって今まで部下だった人間たちと一緒に仕事する事なんて出来ないだろう。むろん、年収は今の半分にはなるがね」

部長のその言葉に、何も言い返せない自分が齒がゆかった。

「分かってくれたかい？　まあ、そんな顔しなくたって、君には入社時から掛けていた会社の財政貯蓄もあるし、当面の生活には困らないだろう。いきなり仕事を切られた派遣村の若者たちとは違うんだから」

何も言い返せない私に、部長は勝ち誇ったように頬を緩め微笑んだ。

それが、私には無性にハラ立って仕方なくなってくる。

「雨宮君、では、長い間ご苦労様な。まあ、これもいい機会だ。とりあえず、そろそろ結婚でもしたらどうだ……」

部長は、私の肩をポンと叩くと、社長室に向かい颯爽と歩き始めた。

しかし、結婚——この言葉が、ついに私の怒りのツボのスイッチを押してしまった。

私の身体の中に、一気に何か熱いモノが駆け巡った瞬間だった。

私は、言葉よりも思わず先に手がでてしまい、自分の前を歩く部長の肩を思いっきり引っ張ってしまう。

「ちょっと待ってよ、アンタ、ああ？　派遣村の若者たちとは違うから安心しろってえ？　バカにしないでよ！　私を誰だと思ってるの。あんなクズみたいなヤツらと一緒にしないで！　……しかもナニ、事につけて結婚しろだあ？　ここまで頑張ってきたのに、やりたい仕事辞めて、何が悲しくて男の世話になんかなんきやなんないのっつーの。例えアンタたちが私のクビ切ろうが、私はねえ、こ

の十数年間で身につけたキャリアとスキル生かして、アンタたち男になんか負けないような一大企業でも起こしてやるっての！ 女だからってねえ、馬鹿にしないでよ！」

悔しくて、頬にはボロボロと涙がこぼれていた。そして、これでもかと言うくらい大きな声で叫んでやった。

不況になんか負けるもんか！

リストラになんか負けるもんか！

——そして、男になんか絶対に負けるもんか！

私は企業という男たちの社会の中で、今まで戦い勝ち残ってきたんだ。だから、これからもうそう。

何がなんでも戦い続けて、男になんて負けない女になってやるんだから！

女——雨宮怜子、三十五歳、アラフォーだからってねえ、夢を捨てて、丸くおさまんはまだまだ早いっつーの！

その女、江尻綾香23歳（前書き）

今回のお話は、綾香目線で物語りは進みます。

その女、江尻綾香23歳

「え〜っ……山村さんも、田所さんもムリとかって何なのよう……！」

私は、次々と送られてくる新着メールを見ながら、ケータイに一人呟いた。

「アヤカ……、仕方ないじゃん。こんなご時世なんだから。まあ、男たちは真っ先に、遊ぶお金を削っていくだろうからね」

私が隣で少し寂しそうな表情を浮かべていた様子に、ミカはどうやら気付いたようだ。彼女は、胸元まであるライトブラウンの色をした髪を綺麗に縦に巻きながら、横目で私に話かけてきた。

「ねえアヤカ、聞いた話じゃさあ、……歌舞伎町のキャバクラ、昨年末とかにたんだ店ケツコー多かったんだって。だからね、キャバクラ辞めて銀座のクラブに転向する子が今は多いみたい。なんだかんだ言ってもさ、やっぱ銀座は不景気とかカンケーなく強いらしいからね。ほらっ、わたしとは客層が全然違うから……っつと、よし出来たあ〜！　ねえアヤカどう、可愛い？」

ミカは、鏡の前で色んな角度で笑顔を作った後、最後に私の目の前で背筋をピンと張り、首をかしげて、ファッション誌のモデルのようにポーズを作ってみせた。

「……うん。可愛いよ。ミカちゃんはスタイル良いし羨ましい」

私は、ミカに少し拗ねたように笑いかける。

「もおっ、アヤカ、ナニ変な顔してんのよ！ アヤカってさ……ちっちゃいし童顔だし、男からしてみたら絶対にアヤカの方が可愛いって思うに決まってんじゃん。そんな風に変な顔したら、アヤカの可愛い可愛い顔を台無しにしちゃうぞ……、コノっ！」

ミカは、両手で楽しそうに私のほっぺを引っ張って無邪気に笑い出した。

「アヤカのほっぺ柔らかくて気持ちいい」

「もう、ミカちゃんのバカ」

私は、短大を卒業後、就職してゆく同級生たちとは違い、池袋の「A-Cast」というキャバクラに勤めることにした。なんでもこのお店は、池袋では一番女の子の質にこだわっていて、池袋のキャバクラの中でナンバー1と呼ばれているらしい。まあ、確かに、もうかれこれ三年ほど、このお店にお世話になってるけど、入店してくる女の子は一体どこで見つけてきたんだろう、って思うほど綺麗な女の子ばかりだ。

そして、女の子たちの方も、自分の容姿やスタイルにかなりの自信を持っている子ばかりで、控え室の中では、『自分が一番よ!』的な見えない火花が走ったりする事が多い。

だから私は、今日みたいにお店が暇で、キャストルームで待機している時は、少し寂しそうな表情を浮かべ、ミカみたいに姉御肌のキャストの子に甘えたりしてじゃれ合うようにしていた。

『私は、あなたには敵いませんよ』

自分の周りにそんな空気感を出す事が、他のキャストたちと軋轢なく、長くお店を続ける事ができる秘訣なんだと、この三年間で私

は学んだんだ。

だって私は、まだこのお店を辞める訳にはいかないから――！

「ねえアヤカもさあ、一緒に銀座への転向考えない？ アヤカくらい可愛いかったら、銀座でここよりも稼げると思うんだけどなあ」

「――ん？ 私はここでいいよ。銀座って器量じゃないし……」

そうそう、謙遜、謙遜。他のキャストに調子乗った態度見せるなんて絶対ありえないし。

しかも、私が探すターゲットは、銀座より、絶対このお店の方が多いし。

ミカとは違って、私は何もお金稼ぐためにこの仕事してるんじゃないのよね。だからいくらお給与が良かったて、銀座にくるようなオッサンたちの相手するなんて、絶対考えられない。

うーん、そうね。理想は、やっぱりマックス三十歳くらいまでかな。

「……そっか、アヤカには銀座はまだ早いか。でもさあ、アヤカって面白いよね。だってアヤカが通ってた短大って、超お嬢様ガッコーじゃん。そんな子が、なんで三年もキャバクラなんかで働いてんのか良く分かんないんだよね……」

「ふふふふ、花嫁修行よ、ミカちゃん」

「花嫁修行……？ なんじゃそりゃ」

細く伸びた綺麗な指にタバコを挟み、ふっーと煙を吐き出すミカに、私はそっと微笑んだ。

花嫁修行——そう、就職もせずキャバクラで私が勤める理由は、理想の結婚相手を探したいからだ。

ホント言うと、短大卒業後にでも、それなりの相手がいれば、私はすぐにでも結婚をしたかった。二十代後半で独身なんて絶対イヤだし、そんなの私にはありえないし。

だけど短大時代に知り合う男性の幅なんて、あきれるくらい狭すぎた。とうてい私が理想とする男性になど巡り逢ったためしなどはなかった。

それなのに、例えばどこか会社に就職して、所得の低い同年代の男と安易に社内恋愛なんかしちゃって結婚話とか進んじやったら、それこそ悲劇じゃん。

だってね、四大卒でも、今の新卒の平均の年収は300万を切るらしいよ。

そんな年収で、どうやって幸せな家庭を作っていけるんだっての。言っとくけど、私、結婚したら働く気はないし。

1,000万とか贅沢は言わないけど、将来の安定とか考えたら、せめて500万くらいの年収は欲しいかな……。

だから、私はキャバクラで理想の男性を探す事にしたんだ。

だってね、例えば短大時代の友達のツテで、何回合コンをしようが、普通の会社員の二十代で、500万の年収を超える人を探すのって、結構ハードルが高いんだよね。

だけど、キャバクラだと、そこそこお金持ってる男が、向こうからやってくるんだもん、こんな美味しい出逢いの場なんてないっての！

しかも、この店は池袋の中でも、セット料金は少し割高で、結構敷居の高いキャバクラなんで、お金持ってなさそうでしみたれた若者なんては滅多に來ないし。

まあ、例えそんなバカっぽい男が入店してきたとしても、絶対そんな男の席に着かされないように、数いるキャストの中でも、私だけが唯一黒髪で清楚なキャラを作って努力してんだから。

だって、ボーイたちも馬鹿じゃないから、ギャルとかが好きそう
なおちやら男に、こんな黒髪の私を着けたりなんては絶対しないから
ね。

私にはいつも、ちゃんと大人っぽい落ち着いた男性の席を用意されて
いた。

まあ、つまりは私がこの店で働く事は、いわゆる『婚活』のひと
つってとこかな。

『アヤカさん、ご新規様一名お願いします』

おっ、呼び出しだ。今日は、さっきメールしていた私の理想の旦那
予備軍が、みんな来れないとの事だったんで、ちょうど良かった。

——さてさて、今日はどんな出逢いがあるのかな！

私は、鏡の前で笑顔のチェックをして、フロアへ続く廊下を歩い
た。まっすぐと続く廊下の先は、フロアに輝くシャンデリアの光が
目映く溢れていた。

フロアの陰で、私はコンシェルジュ役のボーイに案内されている
男を見つけた。

年齢は、おそらく私と同じか少し上くらいだろうか。その男は、
まだ若く見えるのに、すごく落ち着いた雰囲気を持っている男だっ
た。また、すらりとした背丈に加え、どちらかと言えば女性的な顔

立ちがとても美しく、思わず私は彼に見とれてしまう。

「どう？　アヤカちゃん、彼カッコイイだろ……」

「——えっ！」

呆然とその男に見とれてしまっていると、ボーイが急に私の耳元に囁き始めた。

オカモトジュンイチ

「岡本准一、二十四歳。彼ね、まだあんな若いのにFXでかなり儲けてる男なんだよ。アヤカちゃん、知らない？　最近、各ジャーナリストで『FX界の王子様』とかってよく取り上げられてる男。あの若さで、所有する資産は一億は超えると言われてるらしいし……。なんか、まさに時代の申し子って感じだね。アヤカちゃん、今夜は粗相のないように頼むね」

——FX界の王子様あ！？

——資産一億円……！？

うろうろ……キターっ！

理想を超えた、スーパー理想の男じゃん。

女——江尻綾香、二十三歳。ついに勝負の時が来た。私が三年間磨き上げてきた、この小悪魔テクニクで、絶対あの男をオトス！

その女、江尻綾香23歳（後書き）

はじめまして、水嶋かおりです。

「KO・N・KATU」恋は仁義なき戦い！」

ここまで、読んで下さって方、本当に有り難うございます。

男性の皆様からすると、もしかしたら、男をまるで敵視するかのような上昇志向が強い雨宮怜子も、男をお金でしかみないようなしたたかな江尻綾香も、超とっつきにくくムカツクキャラクターかもしれない。でも、もちろん小説の世界ですので多少は極端すぎる性格には作っていますが、できるだけイマドキの三十代と二十代の女性たちの本音、そして彼女たちに対して社会は一体どんな価値付けをしているのかという現状、そのような現代社会における本音の部分をズバズバと顕わに描いてゆきたちと思います。

ですので、中には目を背けたくなるような発言などもあるかもしれませんが、社会の本音を包み隠さず表現した上で、皆様と一緒に「人生の幸せ」なんかをちよっぴり考えてゆければなあと思っています。

最後まで、応援よろしくお願いいたします。

さあ、次回からは、「FX界の王子様編」が始まり、いよいよ物語が走り出します。

FXって、今や若い人たちの間でひそかなブームらしいんですが、なぜ所得の低い若者たちでもそんなに手を出しやすい投資なのか？そして、それはなんでそんなに儲かるのか？はたまた、リスクとかはないの？

今、注目のFXにズバリとメスを入れてゆきます。

是非是非、お楽しみに！！

FX界の王子様編（1）（前書き）

今回のお話は、怜子目線で物語は進みます。

FX界の王子様編(1)

「雨宮怜子さん、三十五歳。へー、すごいですね、あの会社ですつとマネージャーをされてたんだ。雰囲気も、まさにキャリアアウーマンって感じだしカッコイイっすね」

「え……イヤ、その〴〵照れるじゃないですか、やめて下さい」

私は、自分が差し出した履歴書と職務経歴書に限なく目を通し、羨望のまなざしでこちらに笑顔を向けるこの若者に、思わず照れてしまう。

やっぱり、何だかんだと言っても私も女だ。二十代半ばくらいの若い男にチャホヤされたら、まんざらでもない。この人、清潔感もあるしすごく真面目そうだし、ここに来て良かったと、私は内心ほっとする。

「雨宮さん！ 雨宮さんくらいのスキルと経験があれば、絶対すぐに転職先は見つかりますよ。これから一緒に頑張りましょうね！」

「は……はい！ お願いします」

そう、私は今、転職コーディネイトと言われる会社に、転職希望の登録に来ているのだ。

前職を解雇され、転職活動をしているのだが、今はすごいよね。だって、自分の代わりに転職先を探してくれる、こんな会社があるんだから。

転職コーディネイトと呼ばれるこの会社は、いわゆる登録している企業と私たちのマッチングを行う会社だ。これは、人材が欲しい

会社にも、転職を希望する私たちにとってもありがたい会社だ。企業側からすると、広告費と時間を大幅に省く事ができる。転職コーディネイト側に任せておけば、求人募集をするための広告などは必要はなく、その紹介で採用をした時にだけに支払う紹介手数料だけでいいのだ。また、その企業にあったピンポイントの人材だけを面接希望者として企業に紹介してくれるので、企業側は不特定多数を面接する必要もなくなる。

そして、私たち転職希望者にとっても、コーディネイト会社を通す事により、求人を探す手間も省けるし、面接しても採用される確率はぐんと上がるそうなので、本当にありがたい。

私は一連の登録手続きを済ませ、担当コーディネイターに挨拶をして帰ろうとしていた時だった。

「ちょっと待ちなよ、ねーちゃん」

「――はっ!？」

なぜか急に、私がいるブースに、中年の男が入ってきて、私の職務経歴書を手にとり眺め始めた。ちょいワルオヤジ風とでも言うのだろうか？ ノーネクタイに無精ヒゲなんか生やして、どっからどう見ても、不審者そのものである。

「ちよっ……! なんなんですかアナタは――!」

「山崎さん、ナニしてんですか!」

私と担当コーディネイターの声が重なる。

「山崎さん、あなたはもうこの会社の人ではないんだ。帰って下さい! ……あつ、雨宮さんすいません。この人、勝手な事ばっかす

るんで、先月でうちの会社クビになった人なんですよ。すぐに追い返しますので……。本当にすいません」

……って、この人も転職コーディネイター！？

まあ、厳密に言うとは今は違うんだろうけど、明らかに私の目の前にいる好青年とは全く違う。まあ、どっからどう見てもクビになって当然のように思えるんだけどね……。

なんて、まじまじと好青年とこの不審者を見比べていたら、好青年は、その山崎と呼ばれる中年の男をブースから追い出そうと、必死になる。

しかし、その山崎は、若いコーディネイターの腕を払ったかと思うと、急に私の前に顔を近づけてきて話始める。

「なあ、ねーちゃん。転職コーディネイトってなあ、こいつみたいはキレイ事だけではできねえんだ」

山崎は、若いコーディネイターにアゴを向け小馬鹿にする。

「いいかい、現実を教えてやるよ。ねーちゃん、アンタの転職ははつきり言って不可能に近いぜ！」

山崎は、私たちが座る机を両手で叩き、ぶっきらぼうに話始めた。

「企業にとってよお、三十五歳って一番いらねえ年代なんだ。そんな中途半端な年齢のヤツ採用しても、正直使い道がねーんだよ」

——……えっ

『今、この大不況の中で、各企業が一番もてあましている人間とは、

君たち三十代の管理職の人間たちなんだ』

山崎の言葉に、私は一瞬昨日の部長の言葉を重ねてしまう。そして、知らぬ間に、私の背中にひやりと冷たい汗が流れるのが分かった。

「……へへへ、そんな驚いた顔せず、まあ見てみなよこれ」

山崎は、ブース内のパソコンを器用にいじくり、登録会社の求人を一斉に出した。

その数は、何ページにもわたり、ざっと数千社はあるかもしれない。

「いいかい、問題はここからだ。ちゃんとみて見なよ……。いまから年齢条件を三十五歳以上に絞って検索してみてもやるから」

「――！！」

私は、その結果を見て言葉が出なかった。先ほどまで山のようにあった求人一覧が、僅か十分の一程に減ってしまったのだ。

しかも、その求人内容は、工場の整備や清掃など、おおよそ営業と言われるような求人などはほとんどなかった。

「分かったかい？　これが現実だよ、ねーちゃん」

「山崎さん、いい加減してください！　ぼ……僕の担当の転職者になにしてんですか。あなたは、もうウチの会社とは関係がないんだ、早く出でいって下さい！　確かに、雨宮さんの年齢で営業職への転職というのは難しい。しかし、彼女には他の誰にもないような大きなスキルと経験がある。今は不景気だから、どの企業も即戦力を求

めている。雨宮さんは、そういった企業への打ってつけの人材なんだ！ 転職は必ず成功する」

好青年は、必死に山崎に訴えかける。

なんか、昔の青春映画のワンシーンのようで、私としては好青年に益々惹かれてゆくはずなんだろうけど、どうしても山崎の言葉が引っかかるので、私はちよつと山崎に尋ねてみた。

「……結局、なぜ企業側とすれば、私たちの年齢は必要ない訳なの？」

「へへ……二十代のヤツラより金がかかるからだよ」

……また、部長と同じ言葉！？

『会社にとって高い年収が必要な君たちは、会社の贅肉以外の何モノでもないんだ』

私は身体中にイヤな緊張感が走ったかと思うと、口の中が次第に干からびてカラカラになってきた。

「なあ、ねーちゃん、言っとくけどさあ、転職って自分を今まで以上に高く再評価してもらえるみたいな幻想抱いてるヤツが多いけど、ありえないぜ、そんなもん。まあ、簡単に言っちゃえば、どんな理由であれ勤めていた会社辞めた時点で、テメエの価値は半分以下に下がったと思った方がいい」

ぶっきらぼうだが、どこか説得力のある山崎の言葉に、私たちがいるブースにはピンと張り詰めた空気が流れる。

「いいかい？ それから、三十五歳以上のヤツラが企業にとって必要ねえもうひとつの理由は、企業の色に染めにくいからだ。お前らの年代のヤツらって、金にかかるし自分が出来上がっちゃってるし、企業にとっては絶対欲しくないゾーンなんだ。お前ら雇うくらいなら、安い金で二十代のヤツら雇って、企業色に染めたほうが、企業にとっては都合がいい。しかも、ねーちゃんあんたは女で独身だ。例えば、百歩譲って即戦力としてアンタの能力を認めたとしてもな、企業側とすれば、将来結婚や出産をするリスクを持ってるヤツを高い金出してでも雇おうと思うかい？」

私は、まるで金縛りにあったように、恐怖で身体が動かなくなってしまった。

確かに、この男の言うとおりだ。

私は、今まで仕事に熱中するがあまり、社会の中での自分というものの価値をきちんと分析出来ていなかった気がする。

「じゃあ、私はこれから一体どうすれば……」

私の心に、言いようのない恐怖と不安が襲ってくる。私はきっと自分を過剰評価しすぎていたのかもしれない。……不安だ。私は、自分が思っていたほど、本当に優秀な人間なのだろうか？

「へへへ、待ってたぜ、その質問。今日さあ、たまたま忘れ物を取りにココに戻ったんだ。そしたら、あんたがこのブースに入るのが見えた。あんたのスタイルの良さ、そしてこの職歴だったたら、俺には自身がある。アンタを見事に永久就職させてやるぜ。どうよ、今からオレについて来いよ」



結局、私は山崎について行く事にした。

ナゼだか分らない。

外見は全く信用がおけるような男ではないのだが、山崎の説得力のある話に、どうしてもこの人間がどういう人間なのか知りたくもなったのだ。

山崎の話によれば、彼は例の転職コーディネイトの会社に勤めていた時に、ある転職者を企業に紹介するのではなく、起業させてしまったらしい。しかも、それだけではなく、その転職者の起業が大成した事につけ込んで、コンサルティング料と称し、その転職者から莫大なお金を巻き上げていたらしい。そして、そのお金で山崎が作った会社が、私の今いる会社なのだが……

——……えっ!! 私就職斡旋ってこの事!?

なんと、山崎が作った会社というのは、「転職コーディネイト」ではなく、「結婚コーディネイト」の会社だった。

「へへへ……なあ、ねーちゃん。いいかい? さっきも言ったように、アンタが普通の会社に転職できる可能性は0だ。だから、そこで二択問題だ。1つは、オレのこの会社を通して結婚しろ。アンタは美人だし、キャリアを持ってる。この先、アンタが生活には困らないような、年収の高い男を紹介してやるよ。そして、もう1つは、起業しろ! アンタの職歴見ても、雰囲気見ても、アンタは雇われる方じゃねえ。絶対、起業する方に向いている。起業するんなら、オレがそのノウハウを教えてやるよ」

——結婚か起業……?!

どうやら、この男についてきて正解だった。

まだ信用できるかどうか分からない男だが、その突拍子もない提案は非常に面白い。

そして、なぜか分からないが、この男に起業家に向いていると言われるのは嬉しかった。

私としては、結婚はまだまだしたくはないし、当然後者を選んで成功したい。しかし……

「ねえ、山崎さ……ん、起業するにしても資本金はどうすんのよ。私、そんなに貯金はないわよ」

「……ばーか。心配すんな、金ならなんとかしてやる。今からオレがある男を紹介する。アンタは、その男んところに金持って弟子入りして来い。んで、1,000万くらい貯まったら、またここに帰ってくればいい。会社設立の詳細は、それからだ。まあ、アイツんとこ行けば、1ヶ月もあれば簡単に1,000万くらいできるだろう」

ニヤリと不気味な笑いを浮べ、山崎が私に渡してくれた名刺。

——岡本准一……？

——ええっ！？ 岡本准一ってあのFXで有名な岡本お！？

「へへへ、コイツがさっき言ってたオレが起業させてやった転職者だよ」

岡本准一の名刺を見て、驚きを隠せない私を横目に、山崎は少し自慢げにずっと微笑んでいた。

FX界の王子様編（2）（前書き）

今回のお話は、綾香目線で物語りは進みます。

FX界の王子様編(2)

江尻綾香……絶対絶命のピュンチ！

寡黙な男って、確かにカッコイイけど、アナタのはただの沈黙でしょ……なんて、心の中でコノ男をツツコンでも、そんな事で今の状況は打破できない。

ってか私には、そもそもコノ男が、何しにキャバクラに来たのかさえも分からなくなる。

コノ男——そう岡本准一、通称『FX界の王子様』、アナタは一体なんなよ……！！

私がこの席に着いてから、もう十五分は経過してるってのに、コノ男は私には見向きもせず、私がいくら話かけても全く口を開く気配がない。

ただ、彼は黙々とビールを口にする作業だけを繰り返しているのだ。

私は、彼の持つビールグラスの水滴を、そっとハンカチで拭きとりながら、彼を上目に見つめて決意をする。

こうなりゃ、こっちもプロのキャストの意地がある。アナタが王子でも総理でもナニって言うの！ そのハマグリのように閉ざしたお口を絶対開かせてやるんだから！

だってアナタは……私の未来の旦那様候補ナンバー1！

岡本准一、見てなさい。アナタはイケメンの上に資産家なんだか

ら、絶対にこのアヤカ様の虜にしてやるうつ!!

「ねえねえ、岡本さん。岡本さんって、お誕生日いつですか?」

私は、彼の肩にそっと両手を添えて、とびっきりの笑顔で彼の顔を覗き込む。

「……1月10日」

案の定、彼はビールを口にしながらも、ぶっきらぼうに答えてくれた。

よしよし、狙い通り! 大人しい男に口を開かすには、まずは簡単な質問からがセオリーだもんね。

「へー岡本さんって、1月10日かあ。わあっ、山羊座だね」

私は、彼に思いっきりハシャイでそう答える。

ふふふふ……男っていくつになっても、幼児性を残してる人が多いのよね。だから、ほとんどの男は、女に対して少女っぽさや純粋さを求めてる。ホントにバカだよね、そんな女、イマドキないってのに!

だからね、たかが星座、されど星座。小悪魔アヤカ様としては、男が女へ抱くロンマンティックな幻想を、まずは胸いっぱい満たしてあげるの。私は、自分の両手を胸元で握り締め、星座の話に目をキラキラさせた。

「山羊座の人ってね、真面目で誠実な人が多いんだって。なんか、岡本さんって感じだね。岡本さんチョー誠実そうだもん!」

「ん……ああ、そお?」

おっ、おっ、おっ——！ ビンゴッ！

やっぱり、コノ男も、女に対して幻想抱いているタイプだあ！
さっきまでと少し口調が違い、私にちよっぴり照れてるみたいだ。
しかも、彼は、今までテーブルに向かい真っ直ぐと向けていた身体
を、脚を組みかえるようにして、ワザと私と反対側に少し反らした
のだ。

よしよしよし、コレでツカミはOK、さらに小悪魔マジックを披
露してやる。

私は、少し横を向いた彼に、甘ったるいような声で「……ねえ」
とゆっくり呼びかけ、相手の視線をこっちに向ける。

そして、ココが重要だ。

自分に好意を抱かせるには、相手の目を見るのは当たり前だが、
小悪魔流としては、相手の目というか、相手の黒目をじっと見つめ
るように話しかけるのだ。

「アヤコはね、3月2日なんで、魚座なんだよ」

「……へえ」

ふふふ……黒目を見つめるドキドキ効果はやっぱり抜群だあ。

彼の黒目をじっと見つめていると、今まで全く表情がなかった彼
の顔が、まるで若返ってゆくかのようにどんどん色づいてくる。

そこで、私はしばらく彼を見つめた後、無邪気な笑顔を作って、
元気いっぱい言ったんだ。

「山羊座とね、魚座って超アイショーいいんだよ！」

「——……えっ！」

一瞬、彼に笑顔が浮かぶ。どこか照れくさそうで、だけど嬉しそうなそんな笑顔。

私は、彼のその一瞬の笑顔を見逃さず、ワザと彼から視線をはずして下を向く。

「あつ、ゴメンなさい、私……。逢ったばっかなのに、なんか一人ではしゃいじゃってバカみたいだね」

——決まった……！！

王子様、これであなただけ私の虜！

最後の仕上げに、私は照れたようにちょっと頬を膨らませ赤くする。……イヤ、厳密に言えば、これで彼から見れば、私が照れて赤くなったように見えるのだ。なぜなら、小悪魔流ナチュラルメイクがここで効く。メイクの仕上げに使った、愛用のサーモンピンクのチークは、うつむく私を、けなげで純粋な女の子に見せてくれるのだ。

……ってか、山羊座と魚座って、地の星座と水の星座なんで、別にたいして相性なんて良くないんだけどね。でも、いいんだあ。例えばが一、そんな話聞いた事ないとか言われてもさ、「えー、アヤカ流占星術なら、そうなんだけどなあ」なんて、ちょっと可愛く言えば喜ぶ男がいても、ドン引きする男なんていないっての！

そんな風に、うつむきながら、自分のナイスキャストっぷりを、自分でちょっぴり誉めていると、私は自分の太腿にあたったかい温もりを感じた。視線を彼の方に向けてみると、なんと彼は私を包み込むかのように寄り添い、身体をぴったりとくっつけているのだ。

ふふふふ……どうやらハマグリ男は、口だけでなく心も開いてくれたようだ。

恐らく、彼からすると、私は守ってあげなきゃいけないような女

の子に見えてるんだろう。

彼はぎこちない手つきで、私の頭を優しく撫でてくれた。

どうやら、王子様はお金は沢山持つてゐただけで、女性には慣れてないみたい。最初ずっと口を開いてくれなかったのも、ホントは女性に慣れてなかったからなのね。

私は、王子様のそのぎこちない様子に、何だか新鮮さを覚えてしまふ。

王子様……、他の女の子が入ってこれないように、アナタの真っ白な心をアヤカの恋でいっぱい埋めてあげるネ！

ちよっぴり不器用な王子様は、その後はなにも言わずただ私に寄り添っていた。

「お客様、恐れ入りますお時間です。ご延長はいかがなさいますか？」

——えっ！？ もうそんな時間なんだ。

充実した時は、時間がたつのがホントに早い。どうやら、1セツトの四十分がもう終わってしまったみたいだ。私の王子様は、やっぱりキャバクラとかは初めてみたい。急に夢から醒めたように、ボーイの言葉に右往左往する。

「お客様、アヤカさんともう少し一緒にお楽しみになられましたらいかがでしょうか？ ご延長される場合は、セツト料金の追加とご指名代で……」

すると、そんな王子様の姿に、ボーイは必死に営業をかける。まあ、そりゃそうだろう。ボーイも、王子様の事はお金持ちって知ってるんだろうし。

———だけど私は……

ボーイの巧みな言葉に、王子様が延長を告げようとした時、私は人差し指を立てた右手を彼の口にそっと当て、耳元で囁くように呟いた。

『延長してくれるより、今度何か美味しいもの食べに行きたい』

耳元で囁く私の言葉に、王子様は目を丸くして驚く。

そして、そんな彼の姿に私は本当に彼が可愛く思えてくる。

私は、彼の口に添えていた人差し指を、今度は自分の口元にゆっくり持ってきて、首をかしげて彼を見つめて微笑んだ。

「……ね、約束だよ！」

私の可愛い王子様は、困惑した表情を浮かべながらも、ゆっくりと首を縦に振ってくれた。

FX界の王子様編(3) (前書き)

今回の物語は、怜子視点で物語は進みます。

FX界の王子様編(3)

「んもおゝ！ なんなのよコイツ、また留守〜？」

私は、いくら呼び出しをしてもウンともスンとも言わない、マンシヨンのオートロックに、ため息をもらす。

先日、ひよんな事から知り合った、元転職コーディネイターの男、山崎。そして、その山崎は私を起業させてやると約束し、今やFX界でその名前を知らない人はいないという実力者、岡本准一を紹介してくれた。起業するにも、資金力のない私は、まずは岡本の力を借り、起業に必要な資本金を作るって手筈だ。

山崎って男は、みてくれはイマドキ流行らないチョイ悪オヤジ風で、清潔感もないしどうみても不審者っぽい。……だけど、彼の持つ分析力と先見性というものは、何故だか信じたくなくなるような魅力を持っているのだ。

恐らく、この岡本って男も、山崎に出逢ってなければその才能は開花する事なく、きっと普通のどこにでもいる若者だったんだろう。そう考えていたら、この山崎という男の判断力って、まるで恐ろしい魔力のようにも私は感じてしまう。

だけど、結局私は決めたんだ。コイツがどんな男で一体ナニを企んでるのか分からないけど、コイツの力を借りて起業しようって！
そして、私をクビにした部長にヒトアワ吹かせてやるって！

——しかし……

せっかく、私が起業しよって決意を固めたってのに、ナニよ、この岡本って男っ！

山崎に貰った名刺を確認して、携帯、自宅と両方に、何度も電話しても全く出ない。そのうえ、岡本のマンションまでこうやって訪ねてるっていうのに、今日も留守なのだ。

……ホントにもう。私がここを訪ねるのは、今日でもう二回目なんだから！ アンタは私に『三顧の礼』でもさせるつもり？ アンタは諸葛孔明かつーの！

……なんて、心でボヤきながら、オートロックで岡本を呼び出すが、やっぱり返事は全くない。

だけど、よくよく考えたら不思議にも思える。FXやってる人って、朝も昼も晩も夜中も、ずっとパソコンに向かってるイメージがあるのに、こんなにいつも家を開けていいのだろうか……？

——……居留守？

私の心に、一瞬、一抹の不安がよぎる。

……ははは、まさかね。

私は、開かないマンションの扉にもたれ、深呼吸をしようと大きく伸びをした時だった。

一人の若者が、コンビニ袋を抱えて、マンションに入ってきた。

——えっ、あれは岡本……？

マンションの扉にもたれている私の横で、オートロックに鍵を差し込む彼の顔を、私はこれでもかってくらいじっと見つめる。

うん、間違いない。やっぱりこの男は岡本だ。以前、雑誌でみた

顔と同じ顔だもん。

神様ありがとう、神様はまだ私を見捨てていなかったんだね。
私は心の中で、神様にお礼を言い、岡本に声をかける。

「あの、岡本さんですよ。急に訪ねてきて失礼だとは思いましたが、実は私、転職コーディネイターだった山崎さんに……って、はあ……!？」

おいおい、岡本さん、岡本さん、アンタ何やってんのよ、ちょっと——!!

なんと、岡本は、私が声をかけた瞬間、コンビニ袋をその場に投げ出し、全速力で私の前から走り去っていったのだ。

何がなんだか分からない私は、必死で岡本を追いかける。しかし、いくら今日はパンツスーツと言っても、ヒール履いてりゃ全速力はどうてい無理だ。

みるみるうちに、岡本は私の前から消えてゆく。

「ちよっ、待ってよ、このーッ、岡本のバカヤローッ！」

私は、心に湧き上がる悔しさを、誰もいない春の空に叫ぶ事しかできなかった。



「——ええ!？ 岡本は女ギライ？」

「……へへへ、まあまあ、そんなに興奮するなって、ねーちゃん」

「あつ、それから、山崎さん、こないだっから気になってたんだけど、その『ねーちゃん』って呼び方やめてもらいます？ それ言われる度に、私の身体に悪寒が走るんですっ！」

私は、コーヒーショップの机を叩き、山崎にヒステリックに言い放った。

さっきの岡本の態度にハラを立てた私は、事情聴取をしようと、山崎をコーヒーショップに呼び出したのだ。

そしたら、なによ、その女ギライって新事実！ そんなの最初っから言っとけっの！

「へへへ、ねーちゃん……イヤお前さんみたいに、ベッピンさんだったら、女ギライの岡本もイチコロかなとは思ってたんだが、ムリだったか……」

「山崎さんっ、お前さんとかもやめてもらえますかっ！ 私と貴方は、これからビジネスパートナーになる訳ですよ？ 雨宮って、ちゃんと名前で呼んで下さい！ あ・ま・み・やです、分かります！」

私は、アテにしていた岡本に逃げられたショックで、イラつきを隠せなかった。しかも山崎の言葉は、岡本が逃げたしたのが、なんだか私に女の魅力がなかったみたいにも聞こえるし、ホン……ットにコノ山崎って男いいかげんにして欲しい！ この間からずっと思っていたんだけど、まさにコイツは歩く失礼男だわ。

私は、行き場のないこのイラつきを、山崎にぶつけて思いっきり睨みつける。

でも山崎は、そんな風にヒステリックに怒り狂う私を、静かに見つめた後、くしゃくしゃになった煙草をポケットから取り出し呟い

た。

「……アイツはな、本当は可哀想なヤツなんだ」

「……え？」

一瞬の私たち二人の沈黙に、カチツと山崎のが煙草に火を点けるライターの音が静かに響いた。

「アイツ——岡本准一ってな、学生ん時イジメられてたんだよ。……しかも女子に」

「女子にイジメられてたあ？」

「ほら、アイツちょっと女っぽい顔してるだろ？ 高校ん時に、女子生徒たちから化粧させられたり、髪にリボンつけられたりオモチャにされてたそうなんだ。岡本ってさあ、大人しいヤツだから、文句も何も言えずに、女子から好き放題に写メとかとられまくってたんだってさ。……あ、あと、ネットの掲示板によお、女子にイタズラされた写真を貼り付けられ、その掲示板内でもかわれたり、かなり酷い中傷とかも受けたらしいぜ」

山崎は、煙草の煙をふうーと吐き出し、目を細めて話を続ける。

「今度アイツに会ったら、よく見てみな。アイツの目って死んでるから。人間岡本准一は、高校生の時にもう死んだんだよ。そして、アイツの目に映ってんのは、リアルな世界なんかじゃねえ、閉じ込められた自分だけの妄想の世界なんだ。だからよお、俺は岡本にFXを教え込んだよ。FXはいわゆる外貨為替投資ってのは、結局パソコンの中だけの数字の追いかっこなんだ。そこには、他人と関

わる必要性などなく、リアルな金の重さすら麻痺するような世界だ。案の定、岡本はその追いかけて夢中になったよ。なぜならそこは、リアルから弾き飛ばされた岡本が、唯一自分の存在を実感できる妄想の世界だったんだから。世間はな、そんな岡本を『FX界の王子様』とか言ってもてはやしているが、アイツにとっては、そんな風に世間の注目を集めたり、FXでいくら金を稼いだかなんて、全く意味がねえ事なんだ。アイツはただ……他人から閉ざされた空間で、パソコンの中の数字の追いかけてこをする事だけが楽しいんだから」

……私は、山崎の話聞いて、さっきまでの岡本への怒りは無くなり、逆に岡本への哀れみの気持ちが胸にいっぱい襲ってくる。

一番多感な学生時代に受けた、女子からのイジメ……どんなに辛かっただろうか？

クラスのさらされ者になり、どんなに屈辱的だっただろうか？
きっと、それは私が想像出来ないほどの苦しみだったと思う。

だけど、あなたは今も自分の意思とは関係なく、社会という名の世界でさらされ、御輿のようにまつられている。

——岡本准一……あなたの幸せって一体どこにあるの？

私は、胸が苦しくなり、思わずため息をもらす。さっきとは違う、切ないため息だ。

私は、少し冷静になろうとコーヒーを口にした。するとその時、ふと頭の中で何かが弾け、ある事が繋がったような気がした。そして、目の前にいるこの山崎という男が心底恐ろしくなった。私は、山崎の目をしっかりと見据え、山崎に問いかけた。

「山崎さん、結局アナタって、もしかして岡本をただ利用してるだけなんじゃない？　まるで、自分が引きこもりの岡本をヒーローに

したかのような口ぶりだけど、あなたはきっとハナから分かっていた。岡本はFXっていうゲームに夢中になるって事が。そして、例えばそれでお金をいくら稼いだとしても、彼は自分の居場所が欲しかっただけで、特にお金には興味をしめさないだろうってね。だからあなたは岡本の素質を見抜き、彼にFXを教えて夢中にさせた。彼からコンサルティング料と称し、多額のお金を巻き上げるためにね。そして、今回もまた岡本を利用しようとしている。アナタってやっぱりサイテーな男ね」

「……だとしたら、雨宮、アンタどうするよ？ この話から手をひいて、希望のない転職活動をまた繰り返すのかい？」

山崎は、とまどう私に薄ら笑みを浮かべる。

「へへへ……まあいいさ。アンタが俺の事どう思おうと。アンタは社会の中で男に勝つために戦ってきた。そんなアンタが、起業っていう魅力にとりつかれねえ訳ねえからよお」

「ちょっと待ってよ、私は――」

「へへへ……まあ、見てなって。岡本の女ギライの手はもう打ってあるからよお。雨宮、アンタは何も心配せず、もう一度岡本を訪ねたらいい。きっと、その頃にはヤツの女ギライは治ってるよ」

私は、山崎に自分の心を見透かされているようで身体中に恐ろしい緊張感が走る。そして、それと同時に、私は彼の手際の良さに言葉を失ってしまう。詰め将棋で言うなら、山崎は、私の何歩も先を読んでいる。もしかしたら、この間私たちが出会った時にはすでに、今のような状況になるっていうストーリーは、山崎の中で出来ていたのかもしれない。だとしたら、コノ山崎という男は、これから一

体どんなストーリーを私に用意しているのだろうか？

私は、これから先。この山崎というきわめて悪魔的な男と行動を共にすべきかどうか考え込んでしまう。すると、山崎はニヤリと笑みを浮かべて静かに口を開く。

「キャバクラだよ。へへへ……アイツの女ギライを治すために、池袋のキャバクラを紹介してやったんだよ」

「——えっ？」

「アイツに紹介したキャバクラは、池袋でナンバー1のキャバクラだ。女の質もサービスも別格なのさ。だからよお、そんな所で、アイツは女にチャホヤされたら、さすがに女ギライの岡本も、女への抵抗はなるなるだろうよ……へへへ、はっはっは!!」

山崎は、煙草をくしゃくしゃと噛みながら、不気味にずっと笑っていた。

——……ってか、そんなんで女ギライ治る訳ないじゃん!!

その時はいいさ、チャホヤされてさ。

だけど、岡本は資産家としても有名な人だ。そんな岡本がキャバクラなんかに行ったら、金目当ての女たちに言い寄られ、目が覚めた時にはさらに女性に失望するだろう。

ん!？　ちよっと待てよ、山崎まさか、アンタ……——

「山崎、あんた岡本をそのキャバクラに紹介して、金もらったでしょう!」

「へへへ……さあな」

マズイ、岡本准一がマズイ!!

私は、椅子にかけていたジャケットを急いで羽織り、岡本を探す事にした。

「山崎、あんたホン……ツトにサイテー男ね! 私、あんたと組むのやっぱやめるわ!」

私は山崎に思いっきりそう言い放ったあと、伝票を手にして出口へ走った。

「へへへ……、まあ好きにするがいいさ。雨宮あ、どうせアンタは、またすぐオレのところに戻ってくるからよお」

……ったくもう、私ったら、自分の人生もままならない時なのに、なんで人の人生の世話焼こうとしてんだよ——ッ!!

FX界の王子様編(3) (後書き)

コメント、ご評価下さった、すがわらあんこ様、和藤渚様、本当にありがとうございます！

更新へのパワーになりました(＾Ｏ＾)

これからも、宜しくお願い致します。

さあ、いよいよ次回、キャリアウーマン雨宮怜子と小悪魔江尻綾香の対決です！

ぜひお楽しみに！

FX界の王子様編（4）（前書き）

今回のお話は、綾香目線で物語は進みます。

FX界の王子様編（4）

私は、今、とても不思議な気分だった……。

今夜は、王子様とのデートの日。お店を休み、とびっきりのオシヤレをして王子様との食事を楽しもう！

……って思っていたはずなのに、彼は本当に女性慣れしていないようで、食事する場所も飲み物も、メニューも全て私がエスコートをしなければいけなかったのだ。

——私はあなたのママですかっ！！

そんな呟きを胸に秘めながらも、夜景の見えるダイニングバーで食事をした後、私は王子様を連れて池袋の街を少し散歩する事にした。サンシャイン通りから少しはずれた所に、小さな公演があったので、そこで少し酔いを醒まそうと思ったのだ。

「……あつ、ねえ岡本さん、お茶なんか飲みます？」

「えっ……」

——ちよっとお、飲むか飲まないか聞いてるんだから、ハイかいエで答えて欲しいし

なんてまたまたボヤキながらも、私は黙り込む彼に笑顔を向け、自販機に駆けて行った。

そして、お茶を買ったあと、王子様の元へ戻ろうと、私はふと彼の方を見ると、ベンチに腰かけている王子様は、背中を丸めてなんだかとても寂しそうにしていた。

王子様は顔もスタイルも良く、ましてやマスコミなどにも取り上げられる超有名人で、しかも資産家だ。いわば、まさしく王子様と呼ばれるにふさわしい男性だと私は思う。それなのに、今夜王子様と一緒にいて、彼からずっと漂っていた寂しさや、ぎこちなさって一体なんなのか、私には不思議でたまらなかったのだ。

正直、私がキャバクラで出逢ってきた、二十代でお金を稼いでいる男性たちって、みんな自信家でまるで地球の中心が自分って感じの人が多かったから。

なのに王子様、あなたはなぜそんなにいつも寂しそうなもの！？

私が今まで会ってきた男たちとは比べモノにならないくらいの男なのに。

私は、王子様の横でお茶を飲みながら、ずっとうつ向く彼をそんな風に見ていると、今まで黙り込んでいた王子様は、静かに口を開き呟いた。

「アヤカさん……今日は、付き合ってくれて……ほ、本当にありがとう……」

私があげたお茶を握りしめて、しどろもどろになりながらも、まるで言葉を噛み締めるように彼は呟き始めたのだ。

「ぼ……僕は、女の人の事とか、あんまり良く分からなくて……だけど、あなたは僕が今まで出逢ってきた女の人とは全く違って。や……優しくて健気で、ほっ……本当に天使みたいな人です」

「……………!!」

なんだろう、王子様のその言葉に、一瞬、私は胸がいっぱいになった。

今まで、私は何人もの男に口説かれてきた。本気かウソかも分からない駆け引きの中で、色んな愛の言葉を受けて、いい気分になっていた。

だけど、そんなのと全く違って、王子様の言葉は、モゴモゴしていて、よく聞かなきゃナニ言ってるのか分からないような言葉だけど、一つ一つの言葉が一生懸命で、なぜか心に沁みるのだ。

私は、ふと向こう側に目をやると三越が見えた。そう言えば、この三越は五月の頭で閉店しちゃうらしい。

私は、お客様と同伴する時に、よくここで色んなものを買ってもらっていたのを思い出す。

私がおネダリもしないのに、カッコつけて何かプレゼントしようとする男性。

プレゼントにかこつけて、すぐ身体を求めてきた男性。

私の顔色を見ながらプレゼントの値段を決める男性。

……そこには、色んな男性たちとの思い出もあった。

だけど、よくよく考えてみたら、私が一番欲しかったのは、プレゼントとかじゃなかったのかもしれない。

私が一番欲しかったのは、たった一言の言葉で良かったんだ。

王子様が言ってくれた、心からの『ありがとう』という言葉――！

それは、打算も駆け引きも全くない、けがれのない言葉だ。

女が幸せになるには、経済力は必要だ。この考えは、絶対に変わらない。しかし、それだけでも女は幸せにはなれないのかもしれない。

だから、今までキャバクラで、何人もの経済力がある男と出逢っ

てきたのに、恋には発展しなかったんだ。

結局、キャバクラで、男が求めていたものって、金で買える恋だったんだ。

だから、女性がいくら男性に尽くしても、そこにお金が絡んでしまってる分、男性はそれを当たり前だと思ってしまう。

だけど、ホントはそうじゃないんだ。私が求めていたのは、お金だけなんかじゃなく、人間としての思いやりやいたわりだったんだ。当たり前前の事を、当たり前前に思いやり、いたわれる男性。果たして、私の周りに何人いただろうか……。

私は、王子様のその純粹でけがれない言葉に、心があったかくなってきた。そして、なぜか涙が溢れてくる。

食事をごちそうになったのに、『ありがとう』なんて言われるのは始めてだった——！！

王子様、あなたは本当に王子様なのかもしれないね。不器用だけど……真っ白で、純粹で。

私は、キャバクラで働き出して初めてだよ。男性に対して、こんなに温もりを感じたのは。そして、ずっと一緒にいたいと思ったのは。

何だか笑えるね。

私はどんな男でもオトス事ができる小悪魔目指してたのに、王子様の優しさにおとされちゃったみたいだね。

ふふふふ……小悪魔はもう卒業かな。

私は、涙で濡れた瞳で王子様の顔を覗き込む。

「……ねえっ」

「ど……どうしたの、アヤカさん？ や……やっぱ僕、女の人の事とか分からないし、悲しませっちゃったかな？ 涙が出てるよ、ゴメンね」

ん……もおっ！

王子様のバカバカバカ！

そんな事言われたら、私、王子様の事、ホントに大好きになっちゃうよ——！！

……って思った瞬間だった。

「岡本准一……！ やつと見つけたわよ！」

ちよつと、ちよつと、ちよつと——！ 何なよ、この女っ！

せつかくのいいムードをぶち壊すかのように、いきなり一人の女が王子様の前に現れた。そして、その女は、すらりと伸びた脚を大きく広げ、王子様が座るベンチの前で仁王立ちをして、いきなり彼にいいがかりをつけ始めるのだ。

「まったく、岡本准一、アンタ子供じゃないんだから、世話焼かせんじゃないわよ！ アンタには、色々話さなきゃなんない事があるだから、今から私について来なさい！」

王子様は、ヒステリックに言いがかりをつけるその女がよっぽど怖かったんだろう。彼は、私の背中を握りしめ、ずっとブルブルと震えている。そして、私はそんな王子様の姿を見ると、無性に彼を守ってあげたくなってくる。

「ちよつとお、アナタ一体誰ですか？ いきなり現れたかと思った

ら、ヒステリックに怒りだして。いい加減にして下さいよ。彼、イヤがってるじゃないですか」

「アンタには、関係ないでしょう！　っていうか、アンタってもしかして、山崎が言ってたキャバクラの女!？」

……ナニ、この人、山崎とか私知らないし。しかも、なんで私がキャバ嬢だって知ってんのよ！　私は黒髪だし、今日のお洋服もホントに普通の女の子って感じだから、絶対キャバ嬢に見られる訳ないのに、この女一体ナニ者!？

「さあ、岡本准一行くよ！」

とまどう私をよそに、その女は私の背に隠れる王子様の腕を引っ張って、ベンチから立たせようとする。だけど彼は、私の背中に乗ったまま、「……イヤだ」と呟き、今にも泣きそうにしている。私は、そんな彼を見ていると、だんだんこの女に対して怒りがこみ上げてきた。そして、絶対に王子様を渡してなんかやるものかと強く決意した。

「……やめて下さい」

私は女の前に立ち上がり、そう言って彼女を睨みつけた。だけど、彼女は小柄な私より遥かに背が高く、その迫力に少し萎縮しそうになる。

ただ、彼女の顔を睨みつけているうちに分かった事がひとつあった。それは、この女は……私たちよりかなり年上だったこと。だから私は、彼女を睨みつけたまま微笑んでやったんだ。

「……おばさん、早くどっか消えてよ」

「おば、おば……おばさん！？」 男に貢がせて生きてるようなキヤバクラやってるガキがナマ言うんじゃないわよ！ 私は雨宮怜子って名前があるの！ あ・ま・み・や・です！」

ふふふふ、おばさんって言われて焦るのは、おばさんの証拠よ。

まあ、とにかくねえ、私は王子様の事もっともって知りたいし、一緒ににいたい。

だから、私の恋の邪魔をする人は誰であろうが許せないし、この恋を成就させるためには、こんなおばさんなんかには負ける訳にはいかないの。

私におばさんと言われて、さらにヒステリックに声を荒立てる、雨宮という女に、私は思いつきり言っただけだ。

「私……岡本さんとお付き合いさせてもらってる江尻綾香と言います。だから……私たちの恋の邪魔はしないで下さいね、おばさん」

ふふふふ、こうなりや宣戦布告よ！

誰が邪魔しようが、絶対王子様を手に入れてやるんだから！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3469g/>

K O ・ N ・ K A T U ～恋は仁義なき戦い！～

2010年10月9日23時37分発行